

## 「名前を呼んでくださる方」 ヨハネによる福音書 10 章 1-6 節

イエスさまはよく「羊」のたとえ話をされます。今日の箇所は、私たちと神様の関係を、羊飼いと羊の関係でたとえられたお話です。このたとえ話は、ファリサイ派の人々に向けて話されました。彼らは自分たちのことを「優れた人」「誇り高い人」と自負していました。だからこそ、イエスさまがこのたとえ話をされた時、何を言っているのかわからなかったのです。

「羊の囲い」と書いてありますが、よく絵に描かれているような草原に木製の柵の囲いではありません。羊が飛び越えないような高く積まれた「石垣」のようなものが、当時の羊の囲いでした。それは一つの家族で管理するのではなく、複数世帯で管理していました。羊の囲いがあるところには、羊飼いたちの共同体・ムラがあったのです。共同の羊の囲いの中に、それぞれの羊を放牧しておりました。そして不思議なことに、それぞれの羊は自分たちの飼い主を知っている、この事実が今日のお話の一つの肝になります。どんな状況でも、羊飼いと羊は信頼関係を持っているということなのです。名前を知り、声を知る。このことは人格的な深い交わりです。名前を付けて呼ぶということは、相手を尊重し、互いに親しい間柄になるということです。羊飼いは一匹一匹の羊の個性・性格を知っています。それぞれを愛情を込めて名前を呼びます。愛情がこもった声だから各羊は自分の羊飼いの声を聞き分け、その羊飼いにのみ従うのです。これが羊飼いである主イエスと羊である彼の弟子たちとの信頼関係のたとえです。

わたしたちは今こそ、羊飼いと羊たちの信頼関係を見倣いなさいとの勧めを、聖書から聞くべきでしょう。誰にも知られない苦しみ、誰にも知られたくない苦しみというもの、人は抱えているものです。それも人格の一部です。イエス・キリストだけは、その苦しみ悩みを知ってくださっている、これが信頼というものです。このことに信頼を寄せることを、「信仰を持つ」と言うのです。信仰を持って生きるというのは、その意味で単純です。皆から誤解されていても、ただ一人イエス・キリストだけはわたしのことを正しく理解し、人格的な交わりの中に入れてくれると信頼することだからです。信仰とは、キリストへの人格的信頼です。一人ぼっちではないということです。ここにいるすべての方に対して、今日の羊のような単純な信頼が、今求められています。単純な信頼は、良心の主であるイエス・キリストにのみ従うということへと、わたしたちを導きます。羊飼いでない声に聞き従わない自由があります。多くの羊が従わない時に、それによって盗人から身を守ることができます。一人一人の羊飼いや、羊たち同士の連帯が求められています。名前を呼んでくださる方へ、私たちは信頼と信仰を持ち続けたいと願います。